

令和4年度 中学部研究

I 研究テーマ

児童生徒の自立的・主体的な生活につながる授業実践の取組 ～ 各教科等との関連を意識した作業学習の授業実践・評価・改善 ～

II 研究テーマ設定の理由

令和3年度当初、新たに全体研究テーマに基づいた学部研究に取り組むにあたり、以下の3点に基づいて学部研究テーマ及びサブテーマを設定した。詳細については令和3年度の研究の中間まとめ資料を参照いただきたい。

- 1 学校教育目標・学部教育目標から
- 2 これまでの学部研究から
- 3 学部の実情から

III 1年次の研究について

1 研究内容与方法について

1年次の研究では主に以下の内容に取り組んだ。詳細は令和3年度の研究の中間まとめ資料を参照いただきたい。

- (1) 学部研究の基本構想と共通理解
- (2) 作業学習年間指導計画の作成と作業内容、製品、工程等の見直し
- (3) 作業学習版授業づくりシートの作成と活用・改善
- (4) 授業実践とPDCAサイクルによる授業改善の取組
- (5) 研究のまとめ

2 研究の成果と課題

一年間の研究を受け、1年次の成果と2年次の研究に向けた課題を以下にまとめる。

(1) 成果

① 作業学習年間指導計画の作成の流れについて

各作業班でのグループワークにおいて学校教育目標、学部目標と作業学習年間計画の目標の文脈性を確認したことで、学校教育目標や学部目標を意識した作業学習年間指導計画の目標のあり方について共通理解ができた。また、これに関わって、「作業学習に関わる学校教育目標から個別の指導計画目標への文脈性（試案）」を作成した。次年度の年間指導計画作成の際に活用したい。

② 授業づくりシートの活用について

昨年度までの研究で「生活単元学習」の授業において様式を検討してきた「授業づくりシート（単元計画シート、授業記録シート）」を「作業学習」で活用した。昨年度の学部研究では「(学年によっては)シートの作成に関わる職員が限られた」という課題があげられていたが、今年度は作業班毎に「授業づくりシート（単元計画シート）」、作業班内のグループ毎又は個別に「授業作りシ

ート（授業記録シート）」の作成を行ったことで、中学部職員の約半数が、実際に「授業づくりシート」の作成に関わることができた。

③ 授業改善の取組について

6月の作業学習で作成した授業づくりシートに記載された「課題」について、一覧表を作成し、課題を解決するための手立てを組んで実践することで、授業改善の取組につなげることができた。課題をもとに具体的な手立てを明確にして取り組むことで、30件以上の「成果（◎）」の記載が得られるとともに、継続した取組が必要な課題についても、ある程度明確にすることができた。

④ 授業研究会後の授業改善の取組について

授業研究会のグループ協議において、他学部の職員から学部を越えた視点で様々な意見が出された。特に課題については、一覧を作成して担当者で検討し、11月～12月の校内実習期間に授業改善に取り組んだ。担当者間、学部内にはなかった視点で課題を明確にすることができ、それをもとにした授業改善の取組ができたことは、大きな成果だったと言える。

(2) 課題

① 授業づくりシートの様式について

学部研究会の中で「授業づくりシートには生徒の実態を記入する欄がないため、日常的に関わる職員以外は生徒の様子が分かりにくい」という意見が出たことを受け、授業研究会に向けて「作業学習に関わる生徒の実態に関する資料」を作成した。この内容を授業づくりシートの中に取り込むかどうかについて、検討が必要である。

② 各教科との関連について

授業づくりシートに記載してある、関する各教科の主な指導内容について、より詳しい内容を記載するために「学習内容と各教科等の関連」及び「学習内容と関する各教科等の目標・内容」を試作したが、今年度の実践においては、その内容や活用の仕方について学部全体で検討するまでに至らなかった。必要性や実用性の有無も含め、次年度の実践で検討していく。

③ 作業学習の実施方法について

令和3年度の実践を受け、令和4年2月の学部研究会及び学部の年度末反省会の中で検討を重ね、令和4年度は週2回（4時間）の実施による通年方式に切り替えることとなった。具体的な実施の仕方について学部の中で検討し、その都度軌道修正を行いながら実践を積み重ねていくこととなる。

④ 授業研究会及び全体研究会での指導助言の内容から

第2回授業研究会（中学部提案）及び第2回全体研究会において、岩手大学大学院教育学研究科准教授の佐々木全先生から貴重なご助言をいただいた。助言の内容をおおまかに以下にまとめ、次年度に向けての課題ととらえる。

○共に働く教員像づくり

子どもたちのできる状況を作りながら、子どもたちと共に作業学習に取り組む。その姿から子どもたちは様々なロールモデルを見ていく。

○支援の精度を評価、検証するための視点

より深く作業学習のことを研究し、より深く一人一人の生徒を理解する。講じられる「できる状況づくり」の精度が上がる。

○作業工程のリストアップ

作業動作を実現するための要件は何か（良い作業動作の例：正確な動き、迅速な動き、安全で持続可能）。製品の管理が適切になされているか（判断基準がはっきりしていること、ローコストでハイパフォーマンスを目指す）。

○作業分担の根拠は何か

実態把握が十分になされていること（こういう特性があって、こういう適性がある…と説明ができる）。情緒的な思いを感じながら作業できると良い。子どもたちが「自分はこれをすることを期待されているんだ」と感じる事が大切。

○「支援の手立て」について

- ・授業改善の取組等については、その手立てに注目して、【ヒト（伝達と共感）】【モノ（道具と場の設定）】【コト（活動内容とその展開）】の観点で分類して整理するとよい。
- ・「目指すもの（〇〇のために△△する）」という観点で見、考える。また、授業づくりシート等への記載は「〇〇しやすいように、△△△する」のようにする。支援の意図を記すことで、授業者の考えが分かりやすくなる。

○評価に関する事

評価に基づいて目標や手立てがブラッシュアップされる。「ブラッシュアップ」＝「発展する」とは限らない。「今日と同じ」ということもある

「できる状況の中で、できる人になった」→力が付いたので手立てが必要なくなった。

手立てを減らしていった方がよいということではない。当事者が必要なくなったと評価したら、手立てを減らしたり、なくしたりする。

作業に慣れて「飽きてきた」状態は「できる状況の不足」。そんなときこそ発展のチャンス。

○子どもたちが、よりやりがいのある作業内容を保障する、目指していくことが大切である。

IV 2年次の研究の内容と方法

- 1 1年次の研究に基づく、2年次研究の基本構想と共通理解
- 2 作業学習年間指導計画の作成と作業内容、製品、工程等の見直し
- 3 各教科等の目標・内容を関連付けた作業学習の授業実践とPDCAサイクルによる授業改善の取組
- 4 授業づくりシート等の活用、改善
- 5 研究のまとめ

V 研究計画【表1】

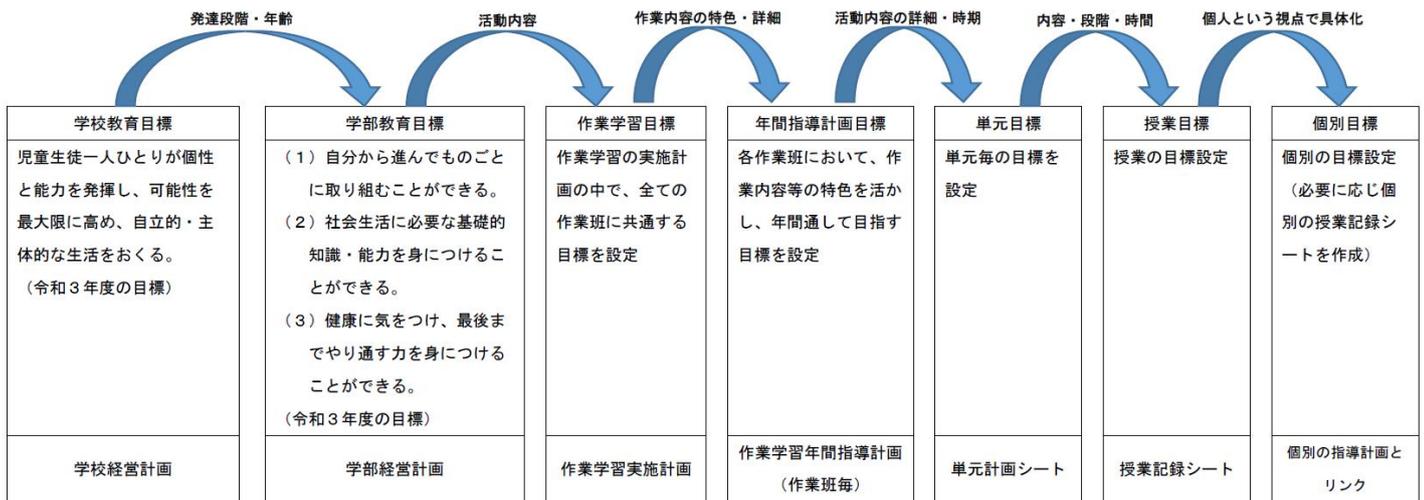
月	期日、内容	主な内容
4	18日 学部研①	<ul style="list-style-type: none"> ・令和4年度前沢明峰支援学校全体研究計画(案)の概要について検討 ・学部研究の方向性について確認 ・授業研究会の担当を協議
5	12日 学部研② 27日 全体研究会①	<ul style="list-style-type: none"> ・学部研究の内容、計画等について協議 ・全体研究会提出資料の検討
6	16日 学部研③	<ul style="list-style-type: none"> ・学部研究の推進 ・授業づくりシートの様式の見直し
7	8日 授業研究会①(小) 21日 学部研④	<ul style="list-style-type: none"> ・学部研究の推進 ・各作業班の実践の紹介①(授業づくりシートの作成)
8	18日 学部研⑤	<ul style="list-style-type: none"> ・学部研究の推進 ・各作業班の実践の紹介②(授業づくりシートの作成) ・授業研究会提案授業指導案等の検討
9	16日 学部研⑥ 20日 ステップアップⅡ研修講座 授業研究会 28日 授業研究会②(中)	<ul style="list-style-type: none"> ・学部研究の推進 ・各作業班の実践の紹介③(授業づくりシートの作成) ・授業研究会提案授業資料の検討
10	20日 学部研⑦	<ul style="list-style-type: none"> ・学部研究の推進 (中) 授業研究会の反省
11	17日 学部研⑧ 18日 授業研究会③(高)	<ul style="list-style-type: none"> ・学部研究の推進 ・各作業班の実践についての評価、課題の検討①
12	15日 学部研⑨	<ul style="list-style-type: none"> ・学部研究の推進 ・各作業班の実践についての評価、課題の検討②
1	16日 学部研⑩	<ul style="list-style-type: none"> ・学部研究のまとめ ・全体研究会②提出資料の検討
2	16日 学部研⑪ 24日 全体研究会②	<ul style="list-style-type: none"> ・学部研究のまとめ ・全体研究会②提出資料の確認
3	10日 学部研⑫	<ul style="list-style-type: none"> ・学部研究の反省 ・研究集録原稿の作成 ・次年度以降の研究についての意見交換

VI 研究推進にあたって

学部研究の推進にあたっては、全体研究のVIで提示されている「学校教育目標等から」「前次研究の課題から」「全体研究会の助言等から」について留意するが、1年次の実践を受け、特に以下の点について学部全体で共通理解を進め実践を行っていくこととしたい。

1 作業学習に関わる学校教育目標から個別の指導目標への文脈性について

学部研究会のグループワークの中で、作業班ごとの年間指導計画を立案する際に、学校教育目標や学部教育目標の文脈を受けたものにしていく必要性を確認した。この流れを【図1】に示す。



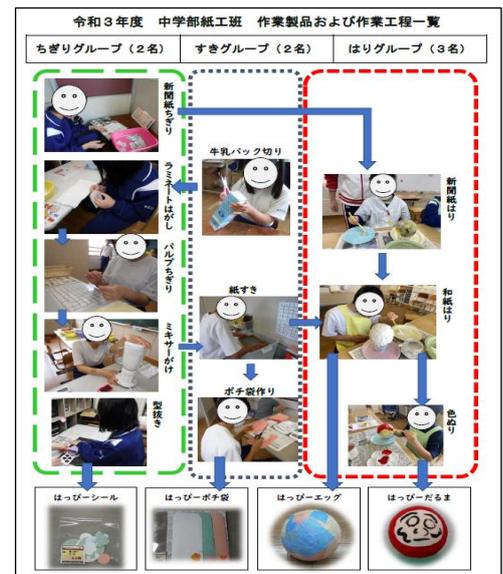
【図1】作業学習に関わる学校教育目標から個別目標への文脈性（試案）

※坪谷ら（2018）の「学校教育目標から個別の支援目標への文脈性」を参考に作成

2 「最後までやり通す」ための「作業工程のリストアップ」と「合理的な作業分担」について

作業学習における製品づくり等を「最後までやり通す」ためには、自分が担当している作業内容が、製品づくりのどの部分を担っているのか、また自分が担当した仕事がどのように製品づくりにつながっていくのか等を理解している必要がある。また、佐々木准教授から作業工程をリストアップすることが「良い作業動作」の実現や、適切な製品管理につながるといった内容の助言もいただいている。「ローコストでハイパフォーマンスな作業学習」を目指すために作業工程の見直しに取り組みたい。

また、個々の生徒が作業工程のどの部分を担うのかという「作業分担」については、生徒の「実態把握が十分になされていること」が必要である。生徒の特性や適性、モチベーションの維持等、どうしてそのような作業分担がなされているのかを、合理的に説明できるように進めていきたい。



【図2】「作業製品及び作業工程一覧」の例

1年次の研究においては紙工班で「作業製品及び作業工程一覧」【図2】を試作した。必要に応じ、他の作業班においても作成を検討していきたい。

3 授業づくりシートの記載の仕方について

令和3年度の授業研究会及び第2回全体研究会において岩手大学の佐々木准教授から助言いただいた以下の内容について、今年度の研究の中で意識して取り組んでいきたい。

(1) できる状況づくりのための「支援の手立て」の書き方について

支援の手立てについては、その意図が分かりやすいように「○○できるように、□□する」「△△しやすいように、◇◇する」などの表記の仕方で統一する。

【例】 布を真っ直ぐ裁断できるように、ペンで印を付ける。

(2) 評価の書き方について

「できる状況づくり」の評価は「児童生徒の学習状況」が「児童生徒の姿」と「支援の手立て」との関連で記述する。

【例】 教師が床に付したラインを指差し「ほら」と声をかけると、それに気がついて脱いだ靴を所定の位置に置き直すことができた。

4 支援の手立ての分析について

支援の手立てについては、以下の2つの観点で整理、評価をする。そのための様式を学部研究の中で検討する。

(1) 「ヒト（伝達と共感）」「モノ（道具と場の設定）」「コト（活動内容と展開）」の三観点での分析

(2) 「事前」「事中」「事後」の時系列における評価

5 令和3年度授業研究会のまとめ資料から

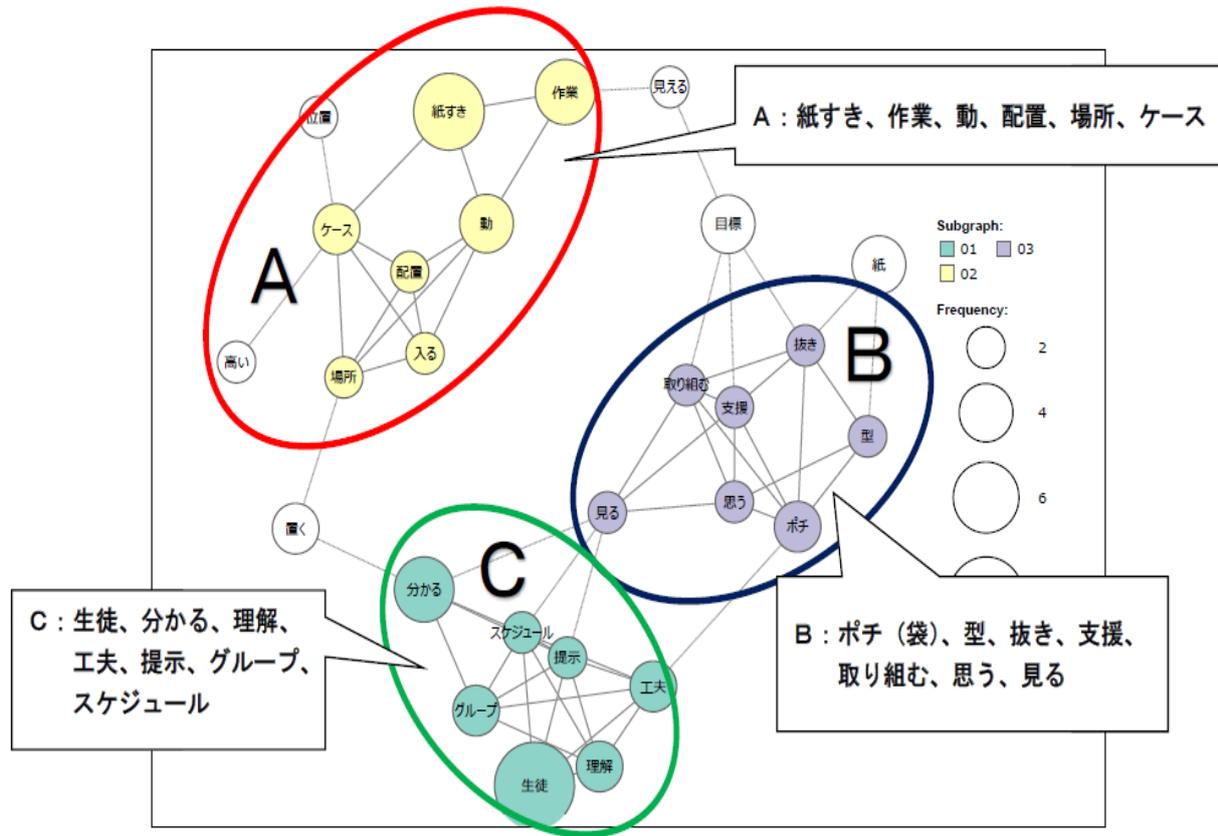
授業研究会のワークショップの中で作成したワークシートの「課題・改善策」の記述からキーワードを抽出し、テキストマイニングによってそれらのキーワードの関係を図式化した。（【図3】「共起ネットワーク図」）

ここから今回の提案授業における課題を以下の3点にまとめた。今後の授業改善の視点として活用していきたい。

A：より効率的に作業を進めるための用具類の配置や、動線の確保

B：品質を向上させるための支援

C：見通しを持つことができるようになるための支援



【図3】「課題と改善策」の記述から得られた共起ネットワーク図

VII 研究の実際

今年度の研究実践の実際を、【表1】研究計画に基づいて実施した、各月の学部研究会の内容に沿って以下にまとめる。

1 一年次の研究に基づく、二年次研究の基本構想と共通理解について（4、5月学部研究会）

一年次の研究を受け立案した全体研究及び学部研究の内容について意見交換を行い、今年度の研究の方向性や具体的な内容について共通理解を行った。

2 作業学習年間指導計画の目標についての作業班毎のグループワーク（6月学部研究会）

年度初めに作成した各作業班の年間指導計画及び個別の指導計画の作業学習の目標について、学校教育目標の文脈に沿ったものになっているかどうかを作業班毎のグループワークの中で確認し、意見交換（必要に応じ見直し）を行った。

今年度の各作業班の年間指導計画の目標は、多少の文言の違いはあったが、概ね4点にまとめることができた。【表2】

【表2】各作業班の年間指導計画目標の概要

	目 標	観 点
1	働くことへの関心をもち、作業に取り組む態度を養う。	学びに向かう力・人間性
2	作業工程や自分が担当する仕事が分かり、他の生徒と協力して作業に取り組む。	知識・技能
3	必要な道具などの使い方を知るとともに、材料や製品の適切な扱い方を身につけ、安全や衛生に気をつけながら作業に取り組む。	知識・技能
4	挨拶や返事、報告、質問など、仕事に取り組む上で必要なやりとりができる。	思考力・判断力・表現力

また、個別の指導計画の目標については、作業班毎に【表3】のように「重点目標」と「指導内容・指導の手立て」を抜粋した一覧表を作成し、それぞれの内容について各作業班の担当者間で確認、意見交換を行った。

【表3】個別の指導計画 作業学習の重点目標等一覧の例（クッキー班）

	重 点 目 標	指導内容・指導の手立て
S1	<ul style="list-style-type: none"> 必要な道具や材料を準備する。 クッキーの生地を決められた大きさに切り、天板にのせることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 道具や材料を文字や写真で示すことで、自分で確認して準備できるようにする スケールを使うことで、大きさの目安が分かるようにする。
S2	<ul style="list-style-type: none"> 作業の流れに見通しをもち、自分から進んで取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> 作業開始の前に流れややり方を確認する。 一人でできそうな時には見守りを行い、できた時には具体的な言葉で称賛する。

なお、【図1】の「作業学習に関わる学校教育目標から個別目標への文脈性（試案）」については、今年度から作業学習の実施形態を「まとめ取り方式」から「通年方式」に変更したため、図中の作業学習目標（年度初めに教務で作成していた「作業学習実施計画」の目標）については除外して考えることとした。

3 各作業班の実践の報告と実践に関わる情報共有及び意見交換（7、8月学部研究会）

4つの作業班の実践を2作業班ずつ2回に分けて（7月：紙工班、クッキー班、8月：クラフト班、手芸班）実施した。各作業班では、それまでに行った授業づくりシート（単元計画シート、授業記録シート）に基づいた授業実践について報告し、情報共有と意見交換を行った。

4 授業づくりシートの様式の改善について

本校中学部で作成している授業づくりシートは、授業全体の「単元計画シート」とグループ毎または個別に作成する「授業記録シート」の2種類から構成されている。一年次の研究で使用した令和3年度版の授業づくりシートの様式には生徒の実態を記入する欄がなかったため「日常的に関わる職員以外は生徒の様子が分かりにくい」という反省があった。そこで、今回は授業記録シートに「本時の活動に関わる生徒の実態と関する教科の目標・内容」の欄を追加した新様式を作成した。内容的に授業（単元）に限定されたものではあるが、その活動に関わる生徒の実態等を記入することは、作業学習の担当者間、学部内の生徒や学習内容等の共通理解につながると思われる。単元計画シートの様式を【図4】授業記録シートの新様式を【図5】、「本時の活動に関わる生徒の実態と関する教科の目標・内容」の記載例を【図6】に示す。

対象	部	年	名
単元名		指導形態	指導者
単元の目標			
知識・技能			
思考力・判断力・表現力			
学びに向かう力・人間性			
関する教科	主な指導内容		
単元計画			
月日	活動名	時数	主な活動内容
単元の評価			
	評価の観点	成果(○、□、△)と課題(●)	改善策
知識・技能			
思考力・判断力・表現力			
主体性			
その他			

※ 評価における成果の記載については以下の記号を使用する。○：自主的・自立的に行動したとき、□：注意喚起を要したとき、△：行動の指示を要したとき

【図4】授業づくりシート（単元計画シート）

授業記録シート

対象	部	年	名	指導者	
単元名		指導形態	期日	月 日	曜日 校時
本時の活動					
単元の目標			本時の目標		
知識・技能					
思考力・判断力・表現力					
学びに向かう力・人間性					
関する教科	主な指導内容				
本時の活動					
時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点(手立て)		備考(教材・教具など)	

本時の活動に関わる生徒の実態と関する教科の目標・内容

活動内容	生徒の実態、学習の様子	関する教科等の目標・内容(主なもの)

本時の評価

本時の目標	評価の観点	支援の手立て	成果(○、□、△)と課題(●)
知識・技能	知識・技能		
思考力・判断力・表現力	思考力・判断力・表現力		
学びに向かう力・人間性	主体性		
その他	その他		

※ 評価における成果の記載については以下の記号を使用する。 ○:自主的・自立的に行動したとき、□:注意喚起を要したとき、△:行動の指示を要したとき

【図5】授業づくりシート（授業記録シート）（令和4年版新様式）

（太枠内が新設した「本時の活動に関わる生徒の実態と関する教科の目標・内容」記入欄）

本時の活動に関わる生徒の実態と関する教科の目標・内容		
活動内容	生徒の実態、学習の様子	関する教科等の目標・内容(主なもの)
ミーティング 日誌の記入	<ul style="list-style-type: none"> ・班長、副班長の号令であいさつをする。 ・日誌にその日の目標や「がんばったこと」を記入し、終わりのミーティングで発表する。 ・難聴であることから、他の班員の発表や一齐に注意をむけること、話している内容の理解が難しい。 ・語彙が少なく、活動内容や反省を具体的な言葉で日誌に書くことが難しい。 	発音や声の大きさに気を付けて話すこと。【国語】 身近な大人や友達とのやり取りを通して、言葉には物事の内容を表す働きや経験したことを伝える働きがあることに気づくこと。【国語】 働くことの目的などを知ること。【職業・家庭】 作業や実習等で達成感を得ること。【職業・家庭】
印つけ 穴あけ	<ul style="list-style-type: none"> ・手順を覚えて、概ね一人で活動を進めることができる。 ・疲れたり活動終了時間が近づいてきたりすると機械操作が難になり、仕上がりにむらが出てしまうことがある。 ・自信がないときに、相談や報告ができなくなってしまうことがある。 	材料の扱い方及び生産に関わる基礎的な技術について知ること。【職業・家庭】 作業課題が分かり、使用する道具等の扱い方に慣れること。【職業・家庭】 作業の持続性や巧緻性を身に付けること。【職業・家庭】

【図6】「本時の活動に関わる生徒の実態と関する教科の目標・内容」の記載例（クラフト班）

5 授業改善の取組に向けた作業班毎のグループワーク（9月学部研究会）

これまでの実践を受け、各作業班において今年度2回目の授業づくりシートを活用した授業実践に取り組むこととし、以下の点を確認した。

- (1) 実施期間は9月～10月
- (2) 作業班毎に単元設定を行い、新様式の授業づくりシートを作成する
- (3) 授業記録シートは各作業班の担当者が、それぞれ直接指導にあたる生徒を抽出して作成する

授業改善の取組の大まかな流れを【表4】に示す。

【表4】授業改善の取組のおおまかな流れ

期日等	内 容	PDCA サイクル
9月15日（木）	【9月定例学部研究会】 授業改善の取り組みの流れを確認	P
9月中旬	・7月、8月の実践報告を受け、9月～11月の授業実践に関わる授業づくりシートの計画部分を作成する。	D
10月末まで	・授業づくりシートに基づく授業実践 ・授業実践を受け、授業記録シートの評価を記入	C
10月20日（木）	【10月定例学部研究会】作業班毎のグループワーク ・授業記録シートの評価をもとに、成果、課題について検討	C・P
11月17日（木）	【11月定例学部研究会】作業班毎のグループワーク ・10月学部研究会で検討した内容をまとめた資料を基に、単元計画シートの評価を検討し、今後の課題と支援の手立てについて意見交換を行う。	P
11月21日（月）～ 12月2日（金）	【校内実習】 ・11月学部研究会で検討した支援の手立ての実践	A
12月15日（木）	【12月定例学部研究会】作業班毎のグループワーク ・校内実習で実践した支援の手立ての評価と新たな課題の洗い出し	C

6 授業研究会の実施について

全体研究の中で計画している授業研究会については、クラフト班での授業を提案授業として設定して実施した。概要を【表5】に示す。

【表5】第2回授業研究会の概要

日時	令和4年9月28日(水) 15:40~16:50
提案授業の内容	中学部 作業学習 クラフト班 「ビー玉なべしきの製作」 (9月20日(火) 3・4校時実施)
対象	中学部 1~3学年
授業者	澤口伸介教諭(T1)、永山由香教諭(T2)
研究会の参加者	49名(指導助言者1、授業者2、進行1含む)
指導助言	岩手大学大学院 佐々木全准教授

授業研究会においては、参加者を6つのグループに分けて授業の成果と課題及び改善策について協議を行い、その内容をワークシートにまとめた。そのワークシートの記述からテキストマイニングによるキーワードの抽出とそれらの関係性を図式化した共起ネットワーク図の作成を行い、成果と課題をまとめた。これらを【表6】に示す。

【表6】授業研究会の成果及び課題

成 果	<p>A:生徒の実態に合わせた作業工程、活動が設定されていた。ミーティングで生徒が頑張ったこと、頑張してほしいことをフィードバックしていた。</p> <p>B:教師の立ち位置、作業中の雰囲気が高く、作業の流れが工夫されていたことで、生徒が集中して取り組むことができていた。</p> <p>C: シンプルな視覚支援や教師の目線など、安心して取り組める環境で、生徒は自信をもって作業していた。</p> <p>D:自主的に機械(ボール盤)を操作することができていた。</p> <p>E:生徒の実態に合わせた作業内容が準備されていた。</p>
課 題	<p>A:自分が担当している仕事の流れが分かる手順表や全体の作業の流れが分かる工程表を作成する必要がある。</p> <p>B:コロナ過により、製品の販売活動への見通しを持たせることが難しい現状なので、生徒が主体的に取り組むための手立てが必要である。</p> <p>C:理解度を深めるための確認等、深い学びにつなげるために教師との対話を増やす。 報告等の場面での言葉遣いについて教師間(学部内)で共通の認識を持つ。</p> <p>D:機械を使って安全に作業するための対策が必要である。治具の開発、活用。</p>

7 校内実習における授業改善の取組(10~12月学部研究会)

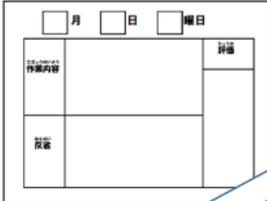
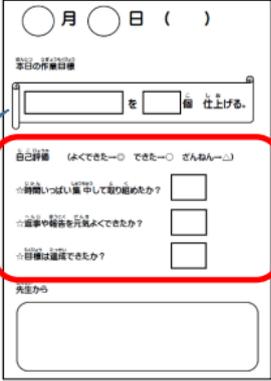
10、11月の学部研究会における作業班毎のグループワークにおいて、それまでに作成した授業記録シートの評価に基づく課題と支援の手立てを検討した。作成した一覧の例を【図7】に示す。

なお、支援の手立てについては【ヒト】【モノ】【コト】の3観点で分類できるように、表中に記載した。

対象	10月までの作業学習で確認した課題	支援の手立て
G H	●作業量が気分によらずに左右されやすい。 集中が続かないことがある。	・気持ちに向かないときは、作業室の自分の席について、立ち歩きや離脱がなければ良しとする。【ヒト】
	●報告のタイミングが図れない。	・気になるところを見に行く、クールダウンをするなど適宜、気分転換をしながら取り組む。【ヒト・コト】
	●羊毛を扱う仕事にやりがいが見いだせていない。	・報告は、一つの仕事の完了が分かりやすい布裂き、シュレッダー作業の時に練習する。【コト】
		・羊毛を振り成形する作業は、作業の進捗状況の把握が感覚による部分が多いため、羊毛については、裂く仕事だけに取り組む。【コト】
成果 (○: 自主的・自立的に行動したとき、□: 注意喚起を要したとき、△: 行動の指示を要したとき)		
	課題 (●)	改善策 (→)

【図7】授業記録シートの評価に基づき作成した課題と支援の手立ての一覧の例（手芸班）

2週間の校内実習の取組を終え、【図7】の一覧を活用して個々に評価を行った後、12月学部研究会において作業班毎のグループワークを行い、情報共有と意見交換を行った。記録をまとめた一覧の例を【図8】に示す。

対象	10月までの作業学習で確認した課題	支援の手立て
C	●作業量は安定しているが、「時間内により良い製品をたくさん作る」といったような、より高い目標を持てるようにしたい。	<p>・当日の作業内容、作業量について自己評価を行ったり、振り返りができたりするような日誌の様式を工夫する。○×で記入できる項目を新たに設定した。【モノ】</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> <p>【これまでの様式】</p>  <p>作業量についての目標設定</p> </div> <div style="text-align: center;"> <p>【新様式】</p>  </div> </div>
成果 (○: 自主的・自立的に行動したとき、□: 注意喚起を要したとき、△: 行動の指示を要したとき)		
○以前よりも大きな声で報告ができた。教師の顔を見て報告ができた。「紙をください」「教えてください」の他に製品の出来栄を確認するための「これでいいですか」などの報告があったことから、製品の質を意識して作業に取り組むことができたと思われる。		
	課題 (●)	改善策 (→)
	●目標や振り返りをより具体的に表現できるようになると良い。	→本人の特性として、長文の理解が難しい面があるので、3語文程度の短めの文を例示する、穴埋め式の定型文を提示するなどして、より具体的な表現に慣れるようにする。【コト】

【図8】校内実習実施後の評価まとめの例（紙工班）

8 校内実習における授業改善の取組のまとめ

12月学部研究会で行ったグループワークのまとめ資料をもとに、今回の授業改善の取組で実施した支援の手立てについて【ヒト】【モノ】【コト】の3観点で分類し、どのような取組を行ってきたのかを一覧にまとめた。【表7】【表8】【表9】

【表7】校内実習における支援の手立てと評価のまとめ①【ヒト】

観点	支援の手立て：一、評価：○（自主・自立な行動）□（注意喚起）△（行動の指示）、●（課題）
ヒ	→態度面よりも技能面の向上を図り、その充実感を態度面に繋げていく。【ヒト】
	○主に角いすの組み立てを担当するようにし、繰り返し取り組むことで見通しをもち、落ち着いて取り組むことができた。 ○電動ドライバーに興味を示したため、ねじ打ちは主に担当するようにしたことで、意欲をもって取り組むことができた。
ト	→気持ちが沈んでいるときなどは、まず気持ちを代弁し、作業に入るよう前向きな声掛けで促す。【ヒト】
	●作業学習以外の要因で、気持ちが不安定になったり、持ち物をわざと忘れてきて気を引こうしたりすることがあった。
	→言葉遣いについては、その場で指導して直すのは難しいと思われるので、正しい言葉遣いを繰り返し伝えて周知することから始める。【ヒト】
	△好ましくない言葉遣いを「他の人が嫌な気持ちになるからやめよう」等と理由を説明することで改善が見られた。
	→やるべきこととそうでないことを一緒に確認しながら進める。【ヒト】
	○手順を確実に理解できている生徒とペアになって活動することで、確認しながら正しく作業を進めることができた。
	→昨年に比べ作業効率が上がっており作業にも取り組んでいる。できない状況であっても無理に作業に入るようにするのではなく声掛けを行い促す。【ヒト】
	○本人と相談して目標数や活動場所を設定したことで、自分が決めたこととして責任をもって取り組む様子が見られた。 △一日の流れや活動内容を、朝のうちに明確に提示することで、気持ちの安定につながった。
	→できる限り木工室に移動し取り組めるように促し、行けない場合でも別の作業場所を検討・準備し、落ち着いて取り組めるようにする。【ヒト】
	□塗装作業など、活動場所が限定される場合には、理由（メリット・デメリット等）を教師が説明することで、提示された活動場所を受け入れて、その場所で活動することができた。
	→作業に気持ちが向かないときは、作業室の自分の席について、立ち歩きや離脱がなければよしとする。【ヒト】
	→作業中に気になるところを見に行く、クールダウンをするなど適宜、気分転換をしながら取り組む。【ヒト】
	●作業能力が伸び、今の仕事では物足りなくなってきた。 ●得意な動きを生かせる仕事がない。
	→作業に必要な道具を自分で準備できるように、手順表の写真と見比べながら確認するように促す。【ヒト】
	△「○○の準備をするよ」の声がけで、手順表を見ながら自分で準備や後片付けをすることができた。声がけがなくても自分から手順表を見て準備することができることもあった。
	→自分で報告することができるようにするために、仕事が終わったタイミングで声がけを行い、仕事が終わったことを確認して報告を促す。【ヒト】
△仕事が終わるごとに「終わったら（どうするの）？」と声がけをすることで「できました」と大きな声で報告することができた。 ●身支度やテーブル拭きの後の報告が少なかった。	
→作業に取り組めないときは、取り組めない理由を確認して、「○○の仕事が上手だからやってみて」等、自分で気持ちを切り替えられるような声がけをする。【ヒト】	
△作業になかなか取り組めないときに、少し様子を見て、目が合った時にジェスチャーで行動を促したり、「やってみる？」と声がけをしたりすることで作業に取り組めることがあった。 ●作業に全く取り組まないこともあった。	

【表 8】校内実習における支援の手立てと評価のまとめ②【モノ】

観点	支援の手立て：→、評価：○（自主・自立な行動）□（注意喚起）△（行動の指示）、●（課題）
モ	→技能面の向上により、作業に対する満足感を得られるような環境づくりを行う。【モノ】
	<p>○主に角いすの組み立てを担当するようにし、繰り返し取り組むことで見通しをもち、落ち着いて取り組むことができた。</p> <p>○電動ドライバーに興味を示したため、ねじ打ちを主に担当するようにしたことで、意欲をもって取り組むことができた。</p>
ノ	→当日の作業内容、作業量について自己評価を行ったり、振り返りができたりするよう、○×で記入できる項目を新たに設定した日誌の様式を使用する。【モノ】
	<p>○以前よりも大きな声で教師の顔を見て報告ができた。「紙をください」「教えてください」の他に製品の出来栄を確認するための「これでいいですか」などの報告があったことから、製品の質を意識して作業に取り組むことができたと思われる。</p> <p>●目標や振り返りをより具体的に表現できるようになると良い。</p>
	→パルプの乾燥状態により、同じ 10g でも見た目の量に違いが生じるので、見た目の違いが大きくなるないように、乾燥状態を均一にしたり、デジタルスケールの上ののせてパルプの計測に使っているタッパーを大きめのものに変えたりする。【モノ】
	<p>○パルプの乾燥状態を均一にしたり、タッパーを大きいものに交換したりしたことで、見た目の量に影響されにくくなった。</p> <p>□計量の際、表示されたグラム数を教師が読み上げることで、10g になるまで微調整をする様子が見られるようになった。</p>
	→新聞紙を決められた大きさよりも小さくちぎらないよう、半分にちぎった新聞紙を色分けするなどした 2 つの箱に分けて入れるようにする。【モノ】新聞紙の中央に印をつけて、そこに指先をあててちぎるようにする。【モノ】
	<p>○新聞紙の中央に印をつけることで、そこに指先をあてて半分にちぎることができた。（線を引いてしまうと、その線のそってきれいにちぎれなかった際に、残った線が気になって、その部分をさらにちぎってしまうため、図のように印をつける手立てが有効だった。）</p> <p>□教師の見守りがあることで安心して作業に取り組むことができた。</p> <p>●一人で作業に取り組めるようにする。</p>
	→落ち着いて作業に取り組むことができるよう、カットテーブルを使用する。【モノ】
	○カットテーブルを使うことで作業に集中する時間が増えた。
	→正しく計量ができるように、分量が見やすく書かれたカードを準備する【モノ】
	●カードに書かれた分量と実際の材料の量を見比べることはできるが、ぴったりになるように増減させることは難しかった。

【表 9】校内実習における支援の手立てと評価のまとめ③【コト】

観点	支援の手立て：→、評価：○（自主・自立な行動）□（注意喚起）△（行動の指示）、●（課題）
コ	→態度面と技能面の向上を目指す。まずは技能面でしっかり取り組めるようにする。【コト】
	○主に角いすの組み立てを担当するようにし、繰り返し取り組むことで見通しをもち、落ち着いて取り組むことができた。 ○電動ドライバーに興味を示したため、ねじ打ちを主に担当するようにしたことで、意欲をもって取り組むことができた。
ト	→作業量を微調整する。【コト】
	→和紙貼りの1サイクルの枚数を10枚から5枚に減らす。【コト】
	○1サイクルの和紙の枚数を10枚から5枚に減らし、5枚の和紙を貼る→報告する→次の5枚をもらうという流れができたことで、以前より集中して作業に取り組むことができるようになり、丁寧に仕上げることができるようになった。 □手元の和紙の枚数を少なくしたことで、作業終了時刻になった際、手元に残っている和紙を貼り終えてから後片付けに入っても、全体の流れに遅れることが少なくなった。 ●報告の際に適切な言葉を使えるようにする。 ●和紙貼りをどこまでやったら終わりなのかを自分で判断できるようにする。
	→一気になるところを見に行く、クールダウンをするなど適宜、気分転換をしながら取り組む。【コト】
	→報告は、一つの仕事の完了が分かりやすい布裂き、シュレッダー作業の時に練習する。【コト】
	○職員の肩をたたいて「終わる」のサインをするようになった。 △終わったタイミングで教師が「終わりました」と声をかけると報告の言葉を話すことができた。
	→羊毛を振り成形する作業は、作業の進捗状況の把握が感覚による部分が多いため、羊毛については、裂く仕事だけに取り組む。【コト】
○羊毛を細かく裂いて小分けのケースに入れることができた。	

9 作業工程の見直しについて

今年度の取組においては、それぞれの作業班で必要に応じた作業工程の見直しを行った。実践例を以下に示す。

（1）製品の仕様を変更した例（紙工班の取組）

紙工班では、紙漉きで作成した和紙を使っただるま作りに取り組んでいる。だるまの大きさは例年、直径18cm程のものが中心であったが、特に厚手の和紙を貼る際に和紙の端が浮き上がってしまうことから、今年度は芯となる風船をこれまでの2倍程度に大きく膨らませることで、風船の表面の曲面をなだらかにし、和紙の端が浮き上がりにくくなるようにした。【図10】

このため風船の表面積が大きくなり、貼り付ける和紙の枚数が2倍近くなったことで、製作に要する



【図10】だるまの大きさの比較

時間も長くなったが、1サイクルで貼り付ける和紙の枚数を10枚から5枚に減らしたこと等により、以前よりも集中して作業に取り組むことができるようになった等の成果も報告されている。

【図11】

対象	10月までの作業学習で確認した課題	支援の手立て
F	●手元にある分を終わらせたいという思いから、終了時刻になってもスムーズに作業を終わらせて、後片付けに移ることが難しかった。	・作業量を微調整する。【コト】 ・和紙貼りの1サイクルの枚数を10枚から5枚に減らす。【コト】
成果 (○:自主的・自立的に行動したとき、□:注意喚起を要したとき、△:行動の指示を要したとき)		
○1サイクルの和紙の枚数を10枚から5枚に減らし、5枚の和紙を貼る→報告する→次の5枚をもらうという流れができたことで、以前より集中して作業に取り組むことができるようになり、丁寧に仕上げることができるようになった。		
□手元の和紙の枚数を少なくしたことで、作業終了時刻になった際、手元に残っている和紙を貼り終えてから後片付けに入っても、全体の流れに遅れることが少なくなった。		
課題 (●)		改善策 (→)
●報告の際に適切な言葉を使えるようにする。		→適切でない言葉での報告があった際は、その都度教師と一緒に適切な言葉での報告を確認し定着を図る。【ヒト】
●和紙貼りをどこまでやったら終わりなのかを自分で判断できるようにする。		→現状の作業工程では数種類の厚さの和紙を、何段階かに分けて重ね貼りをしているので、段階ごとに色を変えるなどして、視覚的に分かりやすいようにする。【モノ・コト】

【図11】 紙工班の取組について

(2) 生徒の実態に合わせて工程の一部を別々にした例 (手芸班の取組)

羊毛フェルトをほぐし、洗浄したものをまとめてフェルトボールを作る作業において、2名の生徒を対象に作業工程の見直しを行った。

羊毛のまとまり【図12】を細かくほぐしたものを、専用の器具(フェルトボールメーカー)

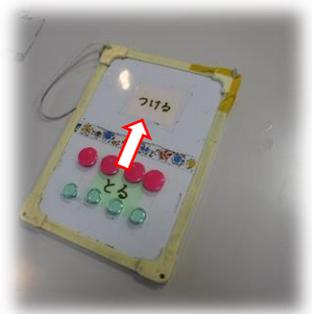
【図13】に入れて洗剤入りのお湯の中で30秒間振って洗浄する工程(A)と、お湯から出して30秒間振って水を切る工程(B)について【表10】のような2つのパターンを準備した。生徒の実態に合わせて(A)と(B)を一つのまとまりとして考えたり、別々のものとして考えたりすることにより、それぞれの生徒が混乱せずに取り組むことができた。



【図12】 羊毛のまとまり



【図13】 フェルトボールメーカー



【図14】 ホワイトボード

【表10】 羊毛フェルトを洗浄する工程のパターン

パターン1	(A)が終わったらマグネットを移動【図14】→(B)が終わったらマグネットを移動
パターン2	(A)+(B)が終わったらマグネットを移動 ※パターン1に比べ同じ作業量であっても移動させるマグネットの数が半減する。

Ⅷ 研究のまとめ

1 成果

(1) 授業づくりシートの様式及び各教科等との関連について

一年次の課題を受けて、授業記録シートの様式の中に「本時の活動に関わる生徒の実態と関する教科の目標・内容」の欄を追加した。(【図5】【図6】参照)

内容的に、その計画に基づく授業(単元)に限定されたものではあったが、その授業(単元)における対象生徒の実態等を記入したことは、作業学習の担当者間、学部内の生徒や学習内容等の共通理解につながり、併せて関する教科等の目標・内容を記入することで、個別目標の設定に関して、より各教科等との関連を意識することにもつながった。

(2) 授業改善の取組から

今年度の作業学習における授業改善の取組は【表4】に示したように、各月の学部研究会での作業班毎のグループワークに多くの時間を割いて行ってきた。各作業班の取組の具体については、【図7】【図8】【表7】【表8】【表9】に示したとおりであるが、これらの取組の中で以下のような成果が得られた。

- ① 各作業班において合計10名の生徒を抽出して授業記録シートを作成し、【ヒト】11点、【モノ】6点、【コト】5点の計22点の支援の手立てを組んで実践を進めることができた。
- ② 評価において、成果として「自主的・自立的に行動した(○)」がのべ15点、「注意喚起を要した(□)」がのべ4点、「行動の指示を要した(△)」がのべ6点の計25点の記述が見られた。
- ③ 実践をとおして新たな課題があげられ、学部研究会のグループワークの中でそれらの課題の改善策について意見交換を行うことができた。これらの改善策のアイデアは、次年度の実践において、より具体的な支援の手立てにつながっていくと考える。

(3) 令和3年度の授業研究会及び全体研究会での指導助言の内容から

令和3年度の研究会に岩手大学大学院教育学研究科准教授の佐々木全先生からいただいた助言の中から、以下の3点について、今年度の実践において成果を得られた部分等を【表11】に示す。

- ① 「作業分担」「やりがいのある作業内容の保障」について
- ② 「支援の手立て」について
- ③ 「評価」について

【表 11】令和3年度の授業研究会及び全体研究会での指導助言に関わる取組の成果

①「作業分担」「やりがいのある作業内容の保障」について	
助言の概要	実態把握が十分になされていること（こういう特性があつて、こういう適性があつて…と説明ができる）。情緒的な思いを感じながら作業できると良い。
今年度の取組と成果	授業記録シートの様式の中に「本時の活動に関わる生徒の実態と関する教科の目標・内容」の欄を追加したことにより、限定された内容ではあつたが、その授業（単元）における対象生徒の実態等や、その授業（単元）において、対象生徒にどのような仕事ぶりが求められているのか等を共通理解することができた。
②「支援の手立て」について	
助言の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・授業改善の取組等については、その手立てに注目して、【ヒト（伝達と共感）】【モノ（道具と場の設定）】【コト（活動内容とその展開）】の観点で分類して整理するとよい。 ・「目指すもの（〇〇のために△△する）」という観点で見ると、考える。また、授業づくりシート等への記載は「〇〇しやすいように、△△△する」のようにする。支援の意図を記すことで、授業者の考えが分かりやすくなる。
今年度の取組と成果	・授業づくりシートへの記載については前述の「Ⅳ 研究推進にあたって」の「3 授業づくりシートの記載の仕方について」を学部全体で確認した。その具体については「Ⅵ 研究の実際」に記載している各作業班の授業づくりシートなどを参照のこと。
③ 評価について	
助言の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・評価に基づいて目標や手立てがブラッシュアップされる。「ブラッシュアップ」＝「発展する」とは限らない。「今日と同じ」ということもある ・「できる状況の中で、できる人になった」→力が付いたので手立てが必要なくなった。手立てを減らしていった方がよいということではない。当事者が必要なくなったと評価したら、手立てを減らしたり、なくしたりする。 ・作業に慣れて「飽きてきた」状態は「できる状況の不足」。そんなときこそ発展のチャンス。 ・「できる状況づくり」の評価は「児童生徒の学習状況」が「児童生徒の姿」と「支援の手立て」との関連で記述する。
今年度の取組と成果	<ul style="list-style-type: none"> ・前述の「7 研究のまとめ」の「1 成果」「(3) 授業改善の取組」にまとめられているようにそれぞれの作業班において対象生徒への支援の手立てが成果を上げ、生徒の成長、変容に合わせて支援の手立てを変更したり、減らしていったりしながら実践を進めている。 ・手芸班の実践では、生徒の成長により担当する作業内容やグルーピングそのものを見直す必要があることが報告されている。【図 15】 ・「できる状況づくり」の評価の記載については「児童生徒の学習状況」を「児童生徒の姿」と「支援の手立て」との関連で記述することを学部全体で確認して進めている。

対象	10月までの作業学習で確認した課題	支援の手立て
G H	●作業量が十分に左右されやすい。 集中が続かないことがある。	・気持ちが向かないときは、作業室の自分の席について、立ち歩きや離脱がなければよしとする。【ヒト】 ・気になるところを見に行く、クールダウンをするなど適宜、気分転換をしながら取り組む。【ヒト・コト】
	●報告のタイミングが図れない。	・報告は、一つの仕事の完了が分かりやすい布裂き、シュレッダー作業の時に練習する。【コト】
	●羊毛を扱う仕事にやりがいが見いだせていない。	・羊毛を振り成形する作業は、作業の進捗状況の把握が感覚による部分が多いため、羊毛については、裂く仕事だけに取り組む。【コト】
成果（○：自主的・自立的に行動したとき、□：注意喚起を要したとき、△：行動の指示を要したとき）		
○職員の方をたいて「終わる」のサインをするようになった。 ○仕事を覚えて一人でできるようになった。 ○羊毛を細かく裂いて小分けのケースに入れることができた。 △終わったタイミングで「終わりました」と話すと言葉を話すことができた。		
課題（●）		改善策（→）
●作業能力が伸び、今の仕事では物足りなくなってきた。		→グルーピングを変えて得意な細かい仕事を担当する。【コト】
●得意な動きを生かせる仕事がない。		→他の作業班の仕事で向いているものがあると思われる（紙工班の○さんのポジションがいいのでは？）【コト】

【図 15】手芸班の取組

（４）学部研究に関する職員アンケートから

研究のまとめに当たり、今年度の学部研究について学部職員対象のアンケートを実施した。主な項目は授業づくりシートの運用に関わるもの、学部研究会のグループワークに関するもの、作業学習の実施方法に関するものの３点に絞った。回答の概要を以下にまとめる。

① 授業づくりシートの運用について

今年度の実践においては、各作業班の職員に授業の中で直接指導に当たる生徒を対象とした授業記録シートの作成を求めたため、ほとんどの職員がシートの作成に直接関わった。シートの様式については多くの職員から「使いやすい」「どちらかと言えば使いやすい」の肯定的な回答を得た。

② 学部研究会のグループワークについて

今年度は学部研究会の中で作業班毎のグループワークを取り入れて実施してきた。作業学習の実施については、必要に応じ担当者間で打ち合わせを行い実施してきているが、学部研究に関わる内容をテーマとしたグループワークを定期的実施したことについて、全ての学部職員から「良かった」との肯定的な回答を得た。具体的な記述をいくつか例示する。

- ・作業班内の共通理解や、他の作業班との情報交換の機会となった。
- ・グループワークを行ったことで、実際の指導に活かすことができた。
- ・設定されないとなかなか話し合うことができず、改善につながらないので良かった。
- ・実際に関わっている生徒の難しい部分、できる部分を伸ばす指導についてじっくり考えるきっかけになった。
- ・作業内容を深めたり、生徒の共通理解をしたりすることにつながった。
- ・教室を分かれて作業しているので、それぞれの様子を知る機会となり良かった。

③ 作業学習の実施方法について

多くの職員から「今年度から始めた通年方式が良い」との回答を得た。理由として以下のような具体的な記述があった。

- ・毎週作業があることで経験が積み重なっていく様子が見られた。

- ・通年にしたことで、生徒が混乱せずに授業を受けることができた。
- ・見通しを持って製品を作ることができた。
- ・(まとめ取り方式は間が空くので) 前の期間のことを忘れてしまったり、継続的な製品づくりが難しかったりするが、通年方式はそのデメリットがなくなり、学習効果も高かったように感じる。
- ・授業の組み立てがしやすかった。

2 課題

(1) 授業づくりシートの様式について

研究のまとめにあたり、中学部職員に対し学部研究に関わるアンケートを実施した。その中で、授業づくりシートに関する項目を設定したが、その回答の中に、『単元計画シート』と『授業記録シート』の様式が似通っていて区別が付きにくい」という意見があった。様式の作成にあたっては、両シートにある同一の項目については「単元計画シート」の内容が「授業記録シート」に参照されるように作成したこもあって、非常に似通ったものとなっていた。

これを受け、当面、両シートの入力が必要なセルに「単元計画シート」はピンク、「授業記録シート」は水色の色を付けて運用することとし、次年度以降の実践の中でより良い形を検討していくこととしたい。【図 16】

単元計画シート				
対象	部	年		名
単元名			指導形態	
単元の目標				
関する教科	主な指導内容			

授業記録シート				
対象	部	年		名
単元名			指導形態	
本時の活動				
単元の目標				
関する教科	主な指導内容			

【図 16】 単元計画シートと授業記録シートの新様式（試作版）

(2) 各教科等との関連について

前述の成果に記載のとおり、目標設定に関わっては各教科との関連を意識して進めることができたが、評価においても、その授業（単元）における成果や課題が、各教科等の目標・内容のどの部分に関連するものなのか、どの部分で成果が上がったのかが分かりやすい様式や記述の仕方について検討する必要がある。

(3) 作業学習の実施方法について

前述の成果に記載のとおり、アンケートの回答から今年度から取り組み始めた通年方式による実施が望ましいと思われるが、具体的記述に「年度初めにまとめ取りをして仕事を覚えたり、環境を整えたりするのも良いか」という意見もあり、今年度始めたばかりの取組でもあることから、今後も継続してより良い形での実施方法を検討していく必要がある。

(4) 授業研究会での指導助言から

「Ⅴ 研究の実際」「(6) 授業研究会の実施について」に前述の第2回授業研究会において、岩手大学大学院の佐々木全准教授からいただいた指導助言の内容を大まかにまとめ、次年度以降の実践の課題とする。

① 生徒の自立的・主体的な活動を引き出す学習活動について

「生徒の自立的・主体的な活動を引き出す学習内容」とは「目標として言語化される」「手立てとしての【コト】」である。生徒が「どんな【コト】に自立的になるか?」「どんな【コト】に主体的になるか?」を考えることが大切である。

以下の観点を例示いただいた。

- ・事前 やってみたい、やれそう、おもしろそう（達成動機、目標、見通し）
- ・事中 できる手ごたえ、もっとやりたい、もっとやれるぞ、心地よさ
（できる状況、個々の手順の面白さや進捗の手ごたえ）
- ・事後 やったぞ、やりとげたぞ（満足感、成就感、進捗達成）

② 支援の手立てについて

手立ての効果（なにを、どう、どのくらい）については「こんな姿だった（ベースライン）」「手立てを講じたら（支援の内容：コト・モノ・ヒト）」「こんな姿になった（結果）」と説明できるようにする。また、支援の手立てを発案、発見するための観点を例示いただいた。

- ・教育目標の実現 「実現状況は〇〇だ」
→実現したかどうかではなく、その達成状況を見取ること、記述することが大切。
- ・【コト】活動内容と展開、【モノ】道具と場の設定、【ヒト】伝達と共感
- ・課題分析（学習コンテンツ）、実態把握（集団、個人、関係）

【参考・引用文献】

- (1) 特別支援学校 小学部・中学部学習指導要領, 文部科学省, 2017
- (2) 特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編(小学部・中学部), 文部科学省, 2018
- (3) 坪谷有也ら, 知的障がい特別支援学校における「主体性理念」の取り扱いに関する論考(2)
－主体性の「定義」「目標」「評価」に着目して－, 2018
- (4) 前沢明峰支援学校 令和3年度全体研究(中間まとめ) 前沢明峰支援学校 HP, 2022
- (5) 前沢明峰支援学校中学部 令和3年度中学部研究(中間まとめ) 前沢明峰支援学校 HP, 2022
- (6) 佐々木全, 令和4年度前沢明峰支援学校第2回授業研究会 指導助言資料, 2022